

「主の恵みの年」

ルカによる福音書 4:16-21

新しい年を迎えて、皆さんどのようにお過ごしになられたでしょうか。

ベツレヘムでお生まれになり、飼葉おけに宿られた主イエスは、40日間の清めの期間を過ぎてから、母マリアとヨセフに連れられてエルサレムの神殿に詣で、犠牲の献げ物をされた後、郷里のガリラヤのナザレという町に帰られ、そこで幼少時代を過ごされました。

イエスさまの幼少時代のことについて、他の福音書は何も記していませんが、ルカによる福音書の記者だけ、2章40節に、「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」と記し、続いてイエスさまの12歳の時のエピソードを記しています。それは、過越祭に、両親に連れられてエルサレムに上った時のことです。祭りが終わった帰り道、両親はイエスさまを見失ってしまったのです。大勢の群衆と共に帰途についたものですから、両親はてっきり道連れの中にいると思い、一日分の道りを行ってから、わが子のいないことに気が付いたのです。慌ててエルサレムに引き返して探し回ったところ、少年イエスは神殿の境内で、学者たちの真ん中に座って議論を交わしていたというのです。12歳というと、小学6年生です。そんな子が権威ある律法学者たちを相手に対等に議論していたというのですから、驚くのも無理はありません。母マリアが、「なぜこんなことをしたのです。どれだけ心配して探したことか」と声を掛けると、少年イエスは「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのをご存知ないのですか」と答えたというのです。「両親にはその言葉の意味が分からなかった」(50)と記されていますが、きっと頭に來たに違いありません。

12歳の少年がこうなのですから、この両親にとって、イエスさまの成長過程には、さまざまな波乱があったのではないかと考えられます。ひゃっとしたり、はらはらしたり、意思の疎通を欠くようなことが、色々あったのではないのでしょうか。おそらく母マリアはその都度、かつて神殿で出会った老シメオンが幼子イエスを抱いて語られた言葉を思い起こしたのではないのでしょうか。シメオンはマリアにこう言ったのです。「あなた自身も剣で胸を刺し貫かれます」(2:35)と。

子どもを育てるということは、大きな喜びでもありますが、しかしまた、大変な心配や労苦が伴うことでもあります。最近ことに、多くの母親たちが子育てに苦労しておられます。イエスの母マリアも例外ではなかったのです。しかし、マリアの偉さは、それら辛いことを、「すべて心に納めて」受け入れ、祈りつつその成長を見守ったということです。彼女は、あの受胎告知のとき、み使いの言葉に戸惑いながらも、「お言葉ど

おりこの身になりますように」と、すべてを主の御手にお委ねしました。その主に従う信仰の姿勢は、その子育てにおいても貫かれ、生涯、変わることがなかったのです。このような母の下で、イエスさまは成長され、両親に仕え、「神と人ともに愛された」(2:52)のです。

イエスさまは、おそらく30歳近くまで、大工であったヨセフの仕事を手伝って、ナザレの両親のもとに留まっておられたと思われます。聖書はその間のことを何も記してはいませんが、イエスさまは30歳ぐらいになってから、家を出て、バプテスマのヨハネから洗礼を受け、神の子としての自覚をもって、神の国の福音を宣べ伝え始められたのです。

今日のルカによる福音書4章16節以下の記事は、イエスさまが郷里のガリラヤに帰られ、ナザレの会堂で最初の説教をしたという記事です。マルコ福音書によると、イエスさまの宣教の第一声は、「ガリラヤへ行き『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」(1:15)とごく簡潔に記されています。マタイ福音書もそれになっていますが、ルカによる福音書によると、ナザレの会堂で、その最初の説教をされた様子が詳しく述べられています。「いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、それを開いて」読み、そのみ言葉について語られたと、かなり細かに、その時の様子が描かれています。

ユダヤの人々の元々の礼拝は、エルサレムの神殿で犠牲を捧げる礼拝でしたが、紀元前6世紀のバビロン捕囚以来、神殿のない場所でも礼拝が出来るように、「シナゴグ」と呼ばれる「会堂」が建てられ、安息日ごとに、律法を教え、詩編や預言書などの解き明かしと祈りを捧げるという、今日の教会の礼拝に似たような形の集會がもたれるようになったのです。その会堂には、「会堂長」と呼ばれる人がいて、礼拝を司式し、会衆の中から適当な人に聖書を朗読してもらい、その解き明かしをしてもらうという自由な形式であったようです。

この日、たまたまイエスさまに、聖書の朗読と解き明かしが指名されたようです。イエスさまは渡されたイザヤ書の巻物を開き、イザヤ書61章1節-2節の箇所を読まれたのです。それがこの18節-19節に記されている内容です。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

このイザヤ書61章のみ言葉は、バビロン捕囚からの帰還を赦された民が、50年ぶ

りにエルサレムに帰って来た時、その中の一人の預言者によって記されたものとされています。50年ぶりに見る国土は荒れはて、神殿は崩壊されたままで、どこから再建してよいのか分からないような有様で、人々は深く失望し、意気消沈してしまったのです。そういう中で、この預言者は、神さまから選ばれ、主の霊に満たされて、預言したのです。主なる神は、「貧しい人に福音を告げ知らせ、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に回復を告げ、圧迫されている人を自由にして下さる。そのために主は、私を遣わして下さった」と。これは、この預言者自身の思いを語ったような表現になっていますが、神さまのみ心をのべたものであり、来たるべき救い主メシアに対する期待と祈りの言葉だと思えます。

イエスさまはこの箇所を読んだ後、巻物を巻いて係ものに返したあと、説教者の席に座って、語られたのです。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と。

「この言葉は、今日、あなたがたが耳にした今、実現した」。これは、「このイザヤ書の預言は、今日ここに実現した。わたしは、このみ言葉を実現し、神さまの支配をもたらすために、この世に遣わされたのだ」という宣言なのです。これは、マルコ福音書で、「時は満ち、神の国は近づいた」と言われたイエスさまの宣教の第一声を、より具体的に、旧約の預言の成就(実現)という形で明らかに示されたものです。

イエスさまの生涯は、まさしく、「貧しい人々に福音(喜びのおとずれ)を告げ知らせ」、「捕らわれている人々に解放を」告げ知らせるためのものでした。この捕らわれている人々とは、牢獄に囚われている人々だけではなく、この世の権力に縛られている人、お金の力に支配されている人、因習に囚われている人など、あらゆる自由を奪われている人々をも含むのです。また「目の見えない人」という言葉は、あらゆる病や障がい、苦しむ人々のことを代表している言葉です。イエスさまは、そのような病む人々、重荷を担う人々を癒して回復させ、すべての「圧迫されている人」を解放し「自由」をもたらすためにこの世に来られ、そのために十字架の道を歩まれたのです。

イザヤ書の預言は、そのような解放と自由がもたらされるときを、「主の恵みの年」(「主が恵みをお与えになる年」と呼んでいます。これは、ユダヤの律法に定められている「ヨベルの年」を暗示しているものと思われます。このヨベルの年というのは、50年ごとに定められていた解放の年で、この年はすべての奴隷が解放され、捕らわれ人は釈放され、貧しい人々の負債が免除され、売られた土地の権利が元の所有者に返されるという、まさに「恵みの時」とされていました。しかし、実際には、この掟は、「絵にかいた餅」のようなもので、実際にはその通りに行われることはなかったようです。

理想と現実、しばしば乖離し、法や人間の力だけではどうにもならないことが多

くあります。イザヤ書の預言者の幻も 600 年もの間、成就しなかったわけです。しかし、主イエスが来られて、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われたのです。つまり、「主の恵みの年は、今日、今こそ実現した」というのです。これは、神の御子が、この世に来られ、神の国の福音を述べ伝え、神の御業を開始されたということによって、すでに神さまの支配、神の国はこの世に来ている、ということなのです。

私たちは新しい年を迎えましたが、わたしたちはこの年をどれだけ「主の恵みの年」として受け止めているでしょうか。この世の現実は、とても恵みの年とは思えない様々な憂いや恐れ、不安な要素が満ちています。コロナの感染拡大が再び広がり、しかもより感染力の強いオミクロン株により、第 6 波が心配されています。また世界の各地に争いや対立があり、緊迫した冷戦状況が見られます。また国内の政治も腐敗し、平和憲法さえ守られず、脅かされています。そういう中で人心の乱れ、経済的な不安など、どこにも希望がないような一年の幕開けでした。

しかし、先週も申しましたように、天地を造り、すべてを支配しておられる主なる神が、愛する御子をこの世にお遣わしになり、御子は私たちと同じ肉をとられ、この世の全ての苦しみ悲しみ痛みを担われ、この世の罪と矛盾の中で苦しみつつ十字架の道を歩まれたのです。その主が死に勝利して復活され、この世の悪しき力に勝利されたのです。イエスさまは、ヨハネ福音書 16 章で「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(33)と言われました。私たちは、この主イエス・キリストの御業をとおして、神さまが、この世に今も生きて働いておられることを示されたのです。

今から 50 年ほど前、カール・バルトという神学者が亡くなりましたが、亡くなる直前に親友の牧師(トゥールナイゼン)と電話でこんな話を交わしたそうです。

「世界は混沌としているね。しかしお互いに意気消沈だけはしないようにしましょうよ。神さまがこの世を支配しているのだから。この世を支配しているのは、アメリカでも、ソ連でも中国でもない。天地を造られた神なのだ。その神がこの世のすべてを支配し、すべての人を御手の内に支えておられるのだ。今も後もだ。だから、希望を失わないようにしましょう」。この電話の数時間後に、静かに息を引き取ったと伝えられています。

そうです。神がこの世を支配しておられるのです。どれほど暗い混沌とした世界でも、「光あれ」と命じて、光と秩序ある世界を創造された主は、イエス・キリストを通して、今もこの世を支配し、導いておられるのです。

この新しい年も、主を見上げつつ、「主の恵みの年」として、希望をもって歩み続けるものでありたいと願います。

アーメン